

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20330180

研究課題名（和文） 明治期初等国語読本とリテラシー形成メディアとしての子どもの読み物に関する研究

研究課題名（英文） Research on child's reading as national language reader and literacy formation media such as beginning of the periods of the Meiji era

研究代表者

府川 源一郎（FUKAWA GENICHIRO）

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：00199176

研究成果の概要（和文）：4年間にわたった本研究を通して、以下のような成果があがった。すなわち、明治期の子どもたちが何を読んできたのか、また、大人たちや文教当局は何を読ませようとしてきたのか、その具体的な様相を明らかにしたことである。また、そこから、急速な近代化の中で、在来の文化との激しい摩擦の中で生み出された様々な活字メディアを通して、子どもたちがどのようなリテラシーを身につけてきたのかを跡づけることもできた。

研究成果の概要（英文）：Achievements like these throughout this study over four years went up. That is, what adults and school authorities have read, or what has been read of children of the Meiji era revealed that particular aspect. In the rapid modernization from that time, the indigenous people were able to author what children have been wearing through various print media-which took place during the fierce friction as well.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	5,700,000	1,710,000	7,410,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教育史、文学

1. 研究開始当初の背景

これまで、明治期の国語教科書研究と子どもの読み物の研究は、それぞれが個別に展開されてきた嫌いがあり、両者を相互に関係させて論じることが十分なされてきたとはいえない。しかし、両者は、密接に関連して展開してきた。その様相を考察するためには、さらに視野を広げて、メディア相互の交流史と言う観点から研究を進めることが有効だと考えられる。また、そのことによって、子どものリテラシー獲得をめぐる研究も前進するはずである。

さらに、この研究は、現在話題になっている「学校の中の読むことの教育と一般の読書活動との関係をどのように改革したらよいか」という問題とも通底している。すなわち、主体的に読書活動をする学習者をどのように育てたら良いのかという問題を考えるための基礎的な考察となるのである。

以上のような背景を踏まえて、メディアがどのようなリテラシーを育ててきたかという明治期の歴史的研究を、現在の教育の課題とつなげて展開することで、教科教育研究の進展に寄与することができるのである。

2. 研究の目的

本研究は、明治初年から明治 30 年代半ば頃にかけて、明治の国民国家体制がゆるやかに立ち上がり確立していく時期を研究対象としている。明治初期から中期に到るこの期間に、学校教育を中心として、子どもたちはどのような読書材料を読んでいたか、それを主に小学校の教科書(読本)の内容をたどることによって、明らかにすることをめざす。小学校の言語教科書(読本)を検討材料にしたのは、それが基礎教育の教材集として広く普及し、子どもたちの内面形成に強く関与した媒体だったからであり、また日本の「国語」を生成する大きな揺籃であったからでもある。

さらに本研究では、読本が学校外の子ども読み物などと、どのような相互交渉を持っていたのかについても考究したい。なぜなら、読本は学校外の文化とも密接な関わりを持っていたからであり、明治期の印刷や出版・流通に関するメディア革命ともいべき大きな転換の影響を受けたからである。その中で、明治の子どもたちが、読本や子ども読み物を通して、どのような近代的なリテラシーを身につけた「近代子ども読者」として育っていったかを、実証的に明らかにしたい。

それはまた、教科書や児童読み物を通して作り上げられた、近代文化の展開の様相を視野に入れつつ、日本近代児童文学史や国語教科書史を書き換えることでもある。

3. 研究の方法

文献資料の収集とその分析が中心となる。明治期の国語教科書類に大きな影響を与えたアメリカのリーダー類との比較分析、明治期の国語教科書(読本)の系統的な調査とその位置付け、さらには周辺の子どもの文化との比較検討を通して、明治期の子どもはどのような知識獲得メディアを通してリテラシーを身につけ自己形成していったのかを、歴史的に探求し、それを記述した。

4. 研究成果

(1)2008 年度の研究成果は以下のようである。知られているように、「学制」を具体化した「小学教則」で教科書として指定された書物は、ほとんどが翻訳啓蒙書だった。しかし、それ以外にも、「子ども」を対象とした「翻訳啓蒙書」が数多く刊行されていた。そこで、これまでほとんど研究の俎上に上がってなかった書物を含めて、39 種類の「子ども向け翻訳啓蒙書」をリストアップし、それらの原典を特定し、またその内容や翻訳の文体を検討した。その多くは、アメリカのリーダーを典拠としているが、海外の修身書なども含まれており、原典の範囲は相当広がっていた。

それらを調査・考察の結果、鳥山啓や福沢英之助、上羽勝衛など、かなり特色のある仕事をした人物の仕事の掘り起こすことができた。また、「子ども翻訳啓蒙書」の中には、従来指摘されてこなかったアンデルセンやグリム、あるいはディッケンズなどの本邦初訳作品が含まれていたという翻訳史における〈発見〉もあり、近代子ども読み物の出発点を、広い視野から確認することができた。このような形で「子ども向け翻訳啓蒙書」を取りあげて総合的に整理したのは、この研究が初めてであり、そのこと自体にも大きな意味がある。このうち、鳥山啓に関する研究は、『読書科学』第 52 巻 2 号に、論文として掲載されている。

(2)2009 年度の研究成果は、以下のようである。明治初期の代表的な国語の教科書は、明治 6 年に田中義廉が編集した『小学読本』だった。それに先行・併行して作製された、福沢諭吉、古川正雄、松川半山などの仕事を検討し、その広がりや限界とを指摘した。

次に『小学読本』を中心に、言語教科書の翻訳に関わる問題とその普及の問題を考察した。『小学読本』は同時期の「子ども向け翻訳啓蒙書」に比べて平易な文章の提供という点においては自覚的だったが、アメリカのリーダーが特色としていた音声や対話などの学習内容を引き継ぐことはなかったことを確認した。

さらに、巻頭に据えられた「五人種」の教材を図像学的に分析し、そこに表れたオリエンタリズムに満ちた欧米の視線と、それに対抗した日本のナショナリズムの図像とを、当時の諸本の図版とを比較検討した。そこから、『小学読本』が西欧文化移入の最先端に位置しており、それが文章や挿絵に反映していたことを明らかにした。

また、中央で用意された『小学読本』が、どのように地方に享受されたのかを、各地の「小学教則」によって確かめた上で、各地域で作製された学校用言語教科書の事例を調査した。その中で『滋賀県管内小学読本』や栃木県の『小学読本』の独自性とその特色を位置づけることができた。『小学読本』をめぐる多数の資料を駆使して、多面的な角度から明治前期の言語教科書の実態とその普及状況を解明することができた。このうち、「五人種」に関する話題は『国語科教育』第 68 集に、論文として掲載されている。

(3)2010 年度の研究成果は以下のようである。

明治 20 年代に入る頃から、就学率は向上し、それにともなって読本の需要も増えていく。多くの民間書肆が言語教科書の製作に関わったが、そのうち最大の存在だった金港堂が他社にぬきんでた成功を収めた理由を、教

科書の教材内容の検討を通して論究した。

一方、文部省も、国家政策として、当時のグローバルスタンダードに沿った『読書入門』『尋常小学読本』という官製の教科書を作製している。それと同時に文部省が作製した簡易科用の『小学読本』を併せて検討することで、日本の近代教育が抱えていた二重性の問題を剔抉し、西欧文化がどのように日本の教育に受容されたかという問題の一端を照らしだすことができた。

さらにまた、検定期初年ならではのユニークな国語教科書である高橋熊太郎の『普通読本』、辻敏之・西村正三郎の『尋常小学読本』、塚原苔園の『新体読方書』、および下田歌子の『国文小学読本』を取りあげて、そのうちの特徴的な教材について検討をした。さらに、明治検定期の代表的な国語教科書について資料を収集し、またそれが子ども読み物である「少年書類」とどのように関係するのかについて考察する準備を整えることができた。このうち、文部省作製の簡易科用『小学読本』に関しては、『国語教育史研究』12号に、論文として掲載されている。

(4)最終年度である 2011 年度の研究成果は、以下のようである。

明治期の修身教育には、口授と講読という二つの教育方法があった。それをことばの教育という側面からみると、教育伝達メディアとして話しことばと書きことば（文字）のどちらを重視するのかという問題に還元される。その問題を様々な資料を駆使して検討した結果、修身口授という教育方法が、言文一致運動を側面から支えるものでもあったという仮説を立てて、それを検証した。

また、明治中期には、様々な形態の修身的な「子ども読み物」が登場する。それらは「教育勅語体制」を補完し、修身教科書の代替の役目を果たすという側面も持っていた。これらの書物を博搜して整理し、その位置と特色を考察した。具体的には、修身教育の大きな流れを踏まえつつ、その周辺にあった「修身読み物」をリストアップし、子どもの読み物文化の一環としてそれを位置づけた。国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで入手できる文献については、ほぼ関連文献の一覧表を作成し、それを分析した。また、「修身口授書」として教室で広範に使われた『修身説約』や、おそらくその校外版だと思われる種々の「修身読み物」類、あるいは絵双紙屋などで売られていたと考えられる「明治赤本」などと学校教育との関連を考察することもできた。

さらには、ヘルバルト学派の修身読み物教育の日本版教材集である樋口勘次郎の『修身童話』とそれに続く仕事を、「修身読み物」の系譜に位置づけて分析した。最後に、国定

教科書が登場する明治 37 年前後には、脱修身読み物とも言うべき書物が、教育の場にも表れ始めてきていたことを調査し検討した。

本年度は、修身教育と修身読み物の抱えていた問題を、声と文字と図像というメディアを切り口として、昨年度までの考察とクロスさせる形で研究を進めることができた。すなわち、明治初期から始まって、国定教科書が出現するまで、すなわち明治 37 年前後までの、修身教育と子ども読み物との関係を、国語教科書と子ども読み物との関係を別の側面から考えることにより、立体的な考察をすることができたのである。

明治期の国語教科書と子ども読み物との関係を調査・考察した本研究の成果は、一書として公刊する予定であり、現在、その準備に入っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

①府川源一郎「明治中期の文部省による二系統の言語教科書—簡易科用『小学読本』の検討—」『国語教育史研究』査読有、12号、2011年、pp1-12

②府川源一郎「『修身読み物』と読書教育」『横浜国大國語教育研究』査読無、第33号、2010年、pp1-12

③府川源一郎「『西洋夜話』に影響を受けた『大日本夜話』—明治初期の子ども読み物の一断面—」『ル・ファール』査読無、5号、2010年、pp67-74

④府川源一郎「田中義廉編『小学読本』冒頭教材の出典について—『五人種』の図像とその意味—」『国語科教育』査読有、第68集、2010年、pp59-66

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007811942>

⑤府川源一郎「『滋賀県管内小学読本』の検討」『横浜国大國語教育研究』査読無、第31号、2009年、pp14-25

⑥府川源一郎「『西洋勸善夜話』における翻案—The National Readers を中心に—」『児童文学研究』査読有、第42号、2009年、pp41-53

⑦府川源一郎「近代日本子ども読み物の開拓者としての鳥山啓」『読書科学』査読有、第52巻2号、2009年、pp60-70

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40016789268>

⑧府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって—明治初期の子ども読み物と教育の接点—」『文学』査読無、第9巻第4号、2008年 pp140-151

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40016170475>

〔学会発表〕(計 3 件)

①府川源一郎「『修身読み物』と読書教育」

日本読書学会、2010年8月7日、全林野会館
②府川源一郎「明治初期国語教科書の検討—
福沢諭吉・古川正雄・松川半山の仕事—」全
国大学国語教育学会、2009年5月31日、秋
田大学

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007386370>

③府川源一郎「近代日本児童文学の起点をめ
ぐって」日本児童文学学会、2008年10月11
日、愛知淑徳大学

〔図書〕（計2件）

①府川源一郎「理論編・3・コミュニケーション・情報・身体」『国語教育総合事典』朝
倉書店、2011年、pp24-33

②府川源一郎「明治初期翻訳啓蒙書と子ども
読み物」『図説翻訳文学総合事典 第5巻・
日本における翻訳文学（研究編）』大空社・
ナダ出版センター、2009年 pp411-429

6. 研究組織

(1) 研究代表者

府川 源一郎 (FUKAWA GENICHIRO)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：00199176